

〈論文〉

『二つの祖国』の歴史的真實性について

唐 楚輝・陳 多友

はじめに

『二つの祖国』は山崎豊子の「戦争三部作」の一つであるが、戦後の描写に重点を置いた『不毛地帯』及び『大地の子』と違い、日系アメリカ人の視点から、パールハーバー攻撃から広島原爆までの第二次世界大戦の流れ及び東京裁判を語った。

日本では、第二次世界大戦を背景として、書かれた文学作品は少なくはないが、日系アメリカ人の視点において、戦争を描いた作品として『二つの祖国』は屈指であろう。その前半部には、「日系人強制収容所」を舞台とし、戦時下日系人社会内部の対立、日系世代の間のギャップが書かれてきた。それで、本稿では『二つの祖国』に対し、部分的でありながら、そのフェノテキストとジェノテキストを読み直すことにより、日系人強制収容所成立の経緯、日系人社会対立の裏に隠された様相、および日系両世代のアイデンティティーの変容を究明したいのである。なぜならば、先述したことを明らかにしておかないと、『二つの祖国』の前半部を把握できないからであろう。

同時に、本稿は作品の外部から、日系人移民史、日本近代史さらに、日本思想史を参照した上で、同テキストの内容を考察し、「日系人強制収容所」におけるテーマも検討してみたい。

一、大統領命令九〇六六号

パールハーバー攻撃後、カリフォルニア州に在住していた日系アメリカ人は、アメリカと日本の間に挟まれた窮地に陥った。「外国人、非外国人を問わず、日本人を先祖に持つすべての住民は、指示する地域より立ち退くこと」<sup>(1)</sup>という「大統領命令九〇六六号」により、日系人はロサンゼルスなどの西海岸地域から内地の収容所に立ち退かざるをえなかった。主人公の家族も例外ではなく、リトル・トーキョーを立ち退かねばならない。

なぜ「大統領命令九〇六六号」が頒布されたのかというと、日本軍が一旦西海岸の本土に攻め込めば、日系人が協力しようとするのかという恐れがあることが考えられるが、と

同時に、その裏にはもっと深いわけが埋められていると言えよう。

1941年12月8日、パールハーバー攻撃直後、ローズベルト大統領は議会で日本に対する宣戦布告を発表し、また、「合衆国の領土が日本帝国に侵略された。よって、現在我が国に在留し、いまだ帰化していない十四歳以上の日本人を、以後『敵性外国人』と呼称する。」<sup>(2)</sup> という大統領布告第二五二五号を発したが、まだ、すべての日系人を西海岸から追い払おうとする「大統領命令九〇六六号」を布告しなかった。1942年2月19日に至って、辛うじて「大統領命令九〇六六号」が公表されるようになった。これによると、すべての日系人が西海岸から離れざるをえなくなったという。そして、取りも直さず、帰化していなかった日系人を「敵性外国人」と見なした「大統領布告第二五二五号」と「大統領命令九〇六六号」との間に、明らかに亀裂があった。果たして両者が前後して、公表された間隔に、何が起こったのか。こういうことを究明しなければならない。私見では、これこそ『二つの祖国』というテキスト成立の背景を把握しうる決め手だと思われよう。

『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』によると、真珠湾事件の敗因を調査した海軍長官ノックスは「日本軍による襲撃の際、極めて効果的な第五列活動（秘かに敵を支援する裏切り行為）があったこと、アメリカ市民権を有する者を含め全体日系人のハワイ諸島からの排除が必要であること」<sup>(3)</sup> という新聞談話を発表した。事後、これは根も葉もない流言に基づいた談話だと証明されたが、「これは、本土においても日系人が国家の安全に極めて危険な存在であるという印象を与え、もともと根強く残る西部諸州の反日感情に火を付け、日系人の集団排除を求める声を煽る結果となった。」<sup>(4)</sup> ノックスの発言をきっかけに、アメリカにおいては、政府と議会にも、民間にも、西海岸にいる全体日系人を強いて立ち退かせる呼び声が盛り上がってきた。

一方に、司法省連邦捜査局のフーバー長官の報告によると、「合衆国の市民権を有する者をも含めて日系人全員の集団強制立ち退きを求める声は、事実に基づく客観的分析によるものではなく、一般大衆の病的興奮と扇動的な政治家や報道機関からの圧力によるものである。」<sup>(5)</sup> さらに、報告を受け止めて、ビドル司法長官は大統領に日系人への退去命令を控えようと建言したにもかかわらず、ローズベルト大統領はとうとう上述した「大統領命令九〇六六号」を発表してしまったゆえに、『二つの祖国』における戦時下の日系米人の悲劇が始まった。

「大統領命令九〇六六号」の頒布を促したアメリカの反日感情は、パールハーバー攻撃直後、生み出されたものではなく、もっと奥深い歴史的要因も孕んでいたと考えられる。

1882年、アメリカで、中国人排斥法が頒布され、大規模の中国人労働者移民が禁止された。一方、日本人移民は急速にアメリカ西海岸へ押し寄せてきた。ゴールドラッシュの名を慕

い、カリフォルニアに来て、鉱物を掘ったり、鉄道を造ったりしていた中国人移民と違い、日本人移民には、農場で過酷に働き、それから、成り上がって、起業できる人もいた。主人公天羽賢治の両親は、そういう典型的な日系一世である。

天羽乙七は、鹿児島県加治木の生まれであった……加治木そのものは貧しい村であった。

乙七は、“郷士”と称する、一朝戦乱の時は槍刀を持って戦うが、平時は百姓をして生活する貧しい下級士族の七男二女の七男に生まれ、望みのない冷飯生活で終わるよりはと、十九歳の時、単身、アメリカ行きの移民に応じ、カリフォルニアのインペリアル・バレーの農業労働に入ったのだった。

……畑の中から太陽が出、畑の中へ夕陽が落ちて行く荒野で、乙七は十年働いた。蓄えた金を資本にして、ロサンゼルスへ出、同県人のクリーニング店に勤め、日本へ引き揚げるようになった主人のあとを譲り受け、五年目からはメキシコ人の使用人を使い、さらに店を広げて来たのだった。<sup>(6)</sup>

そして、天羽乙七のような「アメリカの日本人移民は、それ以前の中国人移民のように苦力労働者としてとどまるのではなく、白人労働者と競合する可能性を持つものとみなされ始めていた。」<sup>(7)</sup> 言わば、日本人移民は地元の白人に極めて脅威を与えたのである。それから、「黄禍論を論拠としてアジア排斥をセンセーショナルに書き立てるイエロー・ジャーナリズムである。日本および日本人、そしてアメリカ国内の日系人に対する恐怖心と不信がアメリカ人の間で急速に育ち始めた。」<sup>(8)</sup>

1906年の日韓人学童隔離問題を皮切りに、排日感情が盛り上がり、日本人移民問題が深刻化しつつあり、「第一次日米危機」に至ってしまった。当時、日本政府は日米協調関係を重視し、「日米紳士協約」を調印し、労働者移民を規制することに約束したが、アメリカの国内では、反日運動が消えなかった。

ほかに、日系一世は1913年のカリフォルニア外人土地法により、土地所有は禁じられたにもかかわらず、日系二世が生まれながら、アメリカ国籍を持った。一世たちは、子供の名義で、土地を購入しつづけていた。それも、新しい排日の理由となった。

1920年代、排外主義の高揚を背景として、1924年の移民法が成立し、日本国内での反米感情が高まりつつあった。と同時に、日本は大陸政策により、満州事変を起こし、その後、蘆溝橋事件をはじめ、中日戦争を拡大させたことが、アメリカの世間一般のみならず、同国の政府と議会にも大きなショックを与え、米国内の排日運動がもっと激化された。1940年末からの日米交渉も破談され、さらに1941年の真珠湾事件が勃発し、それで、上記の「大統領命令九〇六六号」が公布された。

『二つの祖国』はそういう奥深い日本人移民史及び日米関係史を背景として、幕を開い

たのである。

## 二、引き裂かれた日系人社会

収容所における日系人社会は一枚岩ではなく、日系市民協会をはじめとする親米派がほかの日系人たちと、アメリカ政府に従順するかどうかということをめぐり、対立していた。『二つの祖国』にも、その対立を言い及んだ。

日系アメリカ人連合会は、一世たちが舐めた被差別の経験を超えるためには、二世はアメリカ市民としてあらゆることに全面的に協力し、自分たちがアメリカ人であることを白人社会に周知徹底させるべきだとする全国的組織の団体で、親米派と目されていた。

..... 端午の節句になれば鯉幟、正月には凧と羽子板の写真をカラーで印刷し、いろは歌留多も載せて、その日暮しの生活に追われ、祖国を忘れかけている人たちに、日本の伝統と習慣を呼び起こし、どれほど日本精神を鼓舞して下さったことか—..... ところが、日系のアメリカ人連合会のイヌどもは、日本人の誇りなど見失ってしまい、監視塔と鉄条網に囲まれたこの中にあって、なお且つ、アメリカに忠誠を尽せというのは、どういう意味なんです？」<sup>(9)</sup>

そういう状況も、1920年代の頃から、すでにハワイの日系人社会に現れた。

ハワイの日本人社会は、日本人や日本文化への圧力に対してどのように対処すべきかをめぐって紛糾し、積極的にアメリカ化を進めることを支持する同化派と、当局との対決姿勢も辞さずに日本人への差別や圧力をはねのけようとする対決派に分裂した。ハワイ日系社会は米化運動を推進するキリスト教会関係者を中心とする一世および一部の二世を中心とした「米化派」と、その路線に反発を感じる仏教・神道信者の一世、二世との対立を抱えたまま第二次世界大戦を迎えることになった。<sup>(10)</sup>

そして、第二次世界大戦前後において、引き裂かれた日系社会は、まるで鏡のように、近代化の日本の姿を映していた。日米開戦の背景下において、アメリカの主流社会を前にして、日系人社会は従順するか、あるいは対抗するかという矛盾は明治維新以来、日本は欧米の思想、文化に対して、受け入れるのか、あるいは抵抗するのかという対立とよく似ている。面白いことに、キリスト教を旗として、米化運動を進める「米化派」が、仏教・神道を楯とし、米化運動を抵抗していた日系人との対立を、明治二十年代の日本で、すでに起こした。明治前期において、欧化主義によって、政治、経済制度は言うまでもなく、生活、風習、文化、宗教さえ、急速に西洋化に傾いていった。政府の欧化政策のおかげで、キリスト教徒も増えてきた。それに対して、日本の本来の歴史、文化及び宗教を尊ぶことを主張し、極端な西洋化を抵抗した国粋主義も台頭してきた。明治二十三年、キリスト教

徒としての内村鑑三が教育勅語に最敬礼しなかった事件をきっかけにして、日本主義を唱えた井上哲次郎はキリスト教の非国家主義性を非難し、内村鑑三と論争を繰り返してきた。仏教側も破邪顕正運動の名を借りて、国粹主義と合流し、反キリスト教の陣営に加わった。

キリスト教徒の教育勅語不敬事件をはじめ、明治二十年代の「教育と宗教の衝突」の後ろには、「社会立場から、わが国の固有文化や思想の継承や発展に繋がり、歴史の中でとりわけ保守性や順応性をもって位置づけされる仏教と、全く文化や風習の異った欧米のキリスト教とを掌中にし、明治期の両者には近代化をめぐる問題として視座が据えられ、考察がすすめられるのが一般的な様である。」<sup>(11)</sup>つまり、「教育と宗教の衝突」から、日本の近代化における伝統思想と外来思想の抗いが窺える。同じく、戦時下の日系米人社会にも、完全にアメリカ化し、主流社会に溶け込むとか、あるいは、「日本精神」を執着し、白人に支配された社会から自分の独立性を保つのかという二つの路線が対立していた。

そういえば、『二つの祖国』において、引き裂かれた日系人社会はアメリカと日本という「二つの祖国」の間で、思い悩んだのではなく、「日本」的なイデオロギーと「アメリカ」的なイデオロギーの衝突によって引き裂かれたのである。

さらに、史実上の日系市民社会にしても、『二つの祖国』の「日系アメリカ人連合会」にしても、「自分たちがアメリカ人であることを白人社会に周知徹底させる」というアメリカの主流社会に溶け込もうと目指していたことは、かつて欧米列強への仲間入りをしようとする近代化の日本と関わっていた。

維新このかた、日本の目指す進化の目標はむろん「先進」ヨーロッパであったから、そこでの思想評価の際にも、西洋コンプレックスと進歩コンプレックスとは不可分に結びつき…<sup>(12)</sup>

明治日本は先進的な欧米を目指し、近代化を進める一方、欧米を前にして、強いコンプレックス、あるいは劣等感を抱えていた。1880年代の日本、政府は日本の文化、政治制度などを西洋風にして、欧米諸国に自国がすでに近代化したことを認めさせようとした欧化主義の側面は、日本の欧米に対する劣等感が映された。

ほかに、歴史上の日系市民協会は、アメリカに自分たちがアメリカ人であることを認めさせるために、「日系アメリカ人の信条」を書き上げ、アメリカ政府に日系人への強制排除に協力する姿勢を示したばかりでなく、「『最も危険な任務の先頭に立ってどこへでも出撃する』日系人特攻部隊の創設を提案し、さらに日系特攻部隊の忠誠心を疑う人々を安心させるために、日系志願兵の家族や友人が政府の『人質』となると申し出た。」<sup>(13)</sup> そういう提案が却下されたが、日系市民協会は白人社会を自分たちもアメリカ人であると認めさせるために、尊厳、命を惜しまずにアメリカ政府に忠誠を尽くすことは劣等感も示された

のではない。『二つの祖国』にも、チャーリー田宮というアメリカかぶれのキャラクターが登場したのである。

チャーリー田宮は、ロサンゼルスローカル放送局に勤め、日系人とは殆ど交際せず、白人社会へ踏み込んで行くためにあらゆる努力をし、日系人の間で「バナナ」と陰口をたたかれていた。皮膚の色は黄色いが、一皮むけば中味は白い、つまりアメリカかぶれした奴という意味である。<sup>(14)</sup>

白人社会に踏み込んで行くために努力し、「バナナ人」と呼ばれたチャーリー田宮は、まるで、日系市民協会のメンバーのリアルな姿である。そういう「バナナ人」も近代以来、欧米人に自分が文明人として認めてもらおうと努力していた日本人の人間像を反映した。

### 三、「忠誠テスト」——日系世代間のギャップ

1942年6月、ミッドウェー海戦を皮切りに、太平洋戦争の形勢が一転して、米軍に有利の局面となった。アメリカ本土に対する脅威はなくなり、日系人を強制収容する必要がなくなった。そして、アメリカ政府も日系人を兵役に復帰させて、アメリカに忠誠を誓う志願兵を募集することにした。『二つの祖国』の五章『人間テスト』には、アメリカ国防省は日系人に対する志願兵を募集するために、アンケート調査を行った。アンケートにおける二つの質問によって、日系人社会には、とくに世代の間で新たなひびが入った。

質問 27 あなたは命令されれば、どこであろうと、米陸軍兵士として、戦闘任務につきますか

(女性には「もし機会があれば、陸軍看護部隊を志願しますか」)

質問 28 あなたは米合衆国に無条件の忠誠を誓い、外国または国内勢力によるいかなる攻撃からも、米国を忠実に守り、日本の天皇に対していかなる形の忠誠や服従をも拒否しますか。<sup>(15)</sup>

歴史上、アンケート調査には、確かにその二つの質問があった。「その際に『立ち退き』者の早期出所を計っていた戦時転住局と共同で志願・出所のための登録アンケート調査を行った。その際に、天皇への忠誠を捨ててアメリカに忠誠を誓うかという質問を巡って多くの転住所で騒動が起こった。」<sup>(16)</sup>

『二つの祖国』には、主人公の弟、天羽勇は質問 27, 28 に対して、「イエス、イエス」と答え、志願兵に応募した。そのせいで、勇は父の天羽乙七と対立し、大喧嘩した。

「もしヨーロッパ戦線でなく、太平洋戦線へ廻されたら、どげんするとか、お前は天皇陛下に向かって、銃を向ける気か」

乙七は、拳を握りしめた。勇は体を後退らせながら、



「パパ、僕は幼い時から、パパが天皇の写真の前で最敬礼するのを見て来たよ、だけど僕はエンペラーを見たことも、彼の声を聞いたこともないんだ、僕にとって偉いのは、日本のエンペラーよりルーズベルト大統領なんだ」

と云った途端、乙七のアイロンがこの手が、凄まじい勢いで勇の頬に飛んだ。

「こん不忠者！不忠者奴が！」

乙七は狂ったように勇を殴りつけた。勇は床に転び、唇から血が流れた。<sup>(17)</sup>

小説には、日系一世と二世の間で、ナショナル・アイデンティティーにおいて、大きなジェネレーションギャップがあった。「忠誠テスト」によって、そういうジェネレーションギャップが現れ、天羽勇をはじめとする二世は「俺たちはジャップではなく、ジャパニーズ・アメリカンであることを示さなくてはならない、合衆国に忠誠を誓い、銃を執って、勇敢に戦って見せるんだ。」<sup>(18)</sup>と認識し、父の期待に反して、父を痛切に悩ませた。それは日系家庭での「一世と二世の所請新旧思想の相克摩擦」<sup>(19)</sup>である。親と子女が育った国情と教育が著しく違うので、世代間のギャップが生じた。

歴史上、日系世代間でのジェネレーションギャップについて、日系二世の日系アメリカ人史研究家のユージ・イチオカが調査を行った。

当時の一世が考える二世の理想的あり方、つまりアメリカの理想や生活習慣を身につけて、同時に母国日本の理解と日本人としてのアイデンティティも併せ持つ、という目標は、「二世にとって無意味」で、また「頭のなかだけで考えた抽象的な」ものだったと述べた。一世が二世に期待した「日米の懸橋」は「一九三〇年代の終わりにはアメリカでは通用しないものになってしまっており、「懸橋としての役割とアメリカ市民であることは、もはや相入れない概念となってしまっていた」という。<sup>(20)</sup>

「天皇の写真の前で最敬礼する」一世と自分が「ジャパニーズ・アメリカン」であると思った二世間とのギャップは、一世と二世との食い違いによって、生まれたものである。

1882年、中国人排斥法が成立した後、日本人移民がアメリカ西海岸での労働力不足の空白を埋めたにもかかわらず、人種差別および1900年ころからの排日運動を蒙っていた。そのうえ、「当時合衆国政府は『アメリカ文化に同化できない』という理由から東洋人に対して帰化権を認めておらず、長年アメリカで生活してきた一世たちは、帰化不能外国人 (Aliens ineligible to citizenship) として扱われ続けていた。」<sup>(21)</sup>さまざまな外圧が迫ったゆえに、一世の日本人移民は団結せざるを得なかった。一方、日本サンフランシスコ領事館は、日本人移民をまとめるために、1908年、在米日本人会を成立させた。在米日本人会は、正式な証明書発行など一部の領事館の権限を行い、日本政府の政令を移民社会に伝えるなどの社会統制の役目を果たした。在米日本人会の証明書発行について、黒木雅子

氏は高い評価を与えた。

トーピーは、「国民の共同体という理念が、実際に実現されるには、単に『想像される』だけではなく、書類として成文化される必要がある。」として、パスポートの発明とその役割を論じた（トーピー 2008: 10）。トーピーの主張を援用すれば、全米日本人会が発行する証明書という書類とその申請手続きは、それまで均質でなかった一世たちに、日本帝国臣民という共同体の理念に現実的意味を与える役割を果たしたと考えられる。<sup>(22)</sup>

「日本帝国臣民」としての一世に対して、太平洋戦争及び強制収容所をきっかけにして、二世の内面で、「ジャパニーズ・アメリカン」というエスニック・アイデンティティが生まれた。最初から、日系二世も、一世のように、白人からの人種差別を蒙ったけれども、「この点では日系人も、中国系や朝鮮系の移民たちと同じ社会的カテゴリーに含まれていた。」<sup>(23)</sup>しかし、太平洋戦争が勃発し、日系一世、二世にも、「日本人を祖先とする」ゆえに、国籍を問わず、すべて強制収容されてきた。「それまでの日系人に対する偏見・差別の根底にあった東洋人対白人という対立は背景に退き、日本人対アメリカ人という新しい社会的カテゴリーの対立が成立したのである。いいかえれば、太平洋戦争を契機として、二世は自分たちが『アメリカ人』なのか、『日本人』なのかという新しいアイデンティティの確立を迫られたのである。」<sup>(24)</sup>

二重国籍者としての日系二世には、日本へ行ったことがなく、日本語さえろくに話せない人が大勢いたので、日本国籍を持ちながら、自分自身が日本人ではないと思った。逆に、彼らはアメリカで生まれ育ち、アメリカ市民権を持っていて、自分がアメリカ人だと思うのは当然である。しかし、真珠湾事件後、「敵性外国人」と見なされ、「日本人を先祖とする」という特徴が、自分のアイデンティティーを考え直さなければならない。そうすると、ナショナル・アイデンティティーにおいて、自分がアメリカ人であると思っていたうえ、白人系アメリカ人、さらにほかのアジア系アメリカ人と区別して、「ジャパニーズ・アメリカン」における「ジャパニーズ」というエスニック性を認識した。

「忠誠テスト」による天羽家の親子喧嘩は、単なる世代間のギャップだけ映したのでなく、「祖国」に対する両世代間の認識の格差および日系人におけるアイデンティティー変容も内包していた。

## 終わりに

『二つの祖国』という小説における「日系人収容所」を通じて、日系人移民史を遡り、日本近代化の側面を窺え、さらに、日系世代のアイデンティティーの変容も考察した。19世紀以来、日本人はハワイとアメリカ西海岸に移住し、人種差別のすきまで生き抜いた。



太平洋戦争の勃発のせいで、ただ「日本人を祖先とする」というわけで、「敵性外国人」として取り扱われ、強制収容されてきた。「アメリカと日本、どちらに忠誠すべきか？」という二者択一の難問に直面し、日系人社会は引き裂かれて、一世と二世のギャップが顕在化してきた。

『二つの祖国』の扉のページで、「この作品は、当時の歴史事実をもとに、小説的に構成したものである。」<sup>(25)</sup>と書いてあった。つまり、この小説は、日系アメリカ人の歴史記述を基づいて、主人公の天羽賢治および家族を主軸として、作られた「歴史化的なフィクション」である。『二つの祖国』のストーリーは再構築されたフィクションであるが、日系人についての歴史記述と交叉し、日系人の歴史を物語った。

それで、『二つの祖国』における「日系人収容所」を理解しようとすれば、日系人移民史、日本近代史を考察しなければならない。また、日系人のアイデンティティーについての社会心理学研究を参考しないと、天羽家親子の間でのギャップを捉えられない。

#### 【注】

- (1) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P43
- (2) 大谷康夫. 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』. 明石書店. 1997 年 7 月 31 日. P30
- (3) 大谷康夫. 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』. 明石書店. 1997 年 7 月 31 日. P32
- (4) 大谷康夫. 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』. 明石書店. 1997 年 7 月 31 日. P32
- (5) 大谷康夫. 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』. 明石書店. 1997 年 7 月 31 日. P33
- (6) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P43
- (7) 飯野正子 篠田佐多江. 『日米関係を映す鏡—移民史からの接近—』. 『文化評論』. 新日本出版社. 1984 年 5 月. P131
- (8) 飯野正子 篠田佐多江. 『日米関係を映す鏡—移民史からの接近—』. 『文化評論』. 新日本出版社. 1984 年 5 月. P131
- (9) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P89
- (10) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日. P182
- (11) 山本哲生. 『「教育と宗教の衝突」論争をめぐる仏教側の対応 —仏教関係雑誌を中心に—』. 『教育學雑誌』. 日本大学教育学会. 1977 年. P12
- (12) 丸山真男. 『丸山真男集 第七巻 一九五七』. 株式会社 岩波書店. 1996 年 1 月 10 日. P209
- (13) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日. P189
- (14) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P25
- (15) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P175
- (16) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日. P189
- (17) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P181

- (18) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P180
- (19) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日. P183
- (20) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日. P183
- (21) 林春男. 『“Japanese American” の成立』. 『実験社会心理学研究』. The Japanese Group Dynamics Association. 1987. Vol. 27. P2
- (22) 黒木雅子. 『日系アメリカ人のアイデンティティ変容—エスニシティ, ジェンダー, 国家を超えて—』. 『人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要』. 京都学園大学人間文化学会. 2016 年 3 月. P83
- (23) 林春男. 『“Japanese American” の成立』. 『実験社会心理学研究』. The Japanese Group Dynamics Association. 1987. Vol. 27. P2
- (24) 林春男. 『“Japanese American” の成立』. 『実験社会心理学研究』. The Japanese Group Dynamics Association. 1987. Vol. 27. P2
- (25) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日. P8

#### 【引用文献】

- (1) 山崎豊子. 『二つの祖国 (上)』. 新潮社. 1986 年 4 月 25 日
- (2) 大谷康夫. 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』. 明石書店. 1997 年 7 月 31 日
- (3) 飯野正子 篠田佐多江. 『日米関係を映す鏡—移民史からの接近—』. 『文化評論』. 新日本出版社. 1984 年 5 月
- (4) 山倉明弘. 『市民的自由 アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』. 彩流社. 2011 年 12 月 20 日
- (5) 山本哲生. 『「教育と宗教の衝突」論争をめぐる仏教側の対応—仏教関係雑誌を中心に—』. 『教育學雑誌』. 日本大学教育学会. 1977 年
- (6) 丸山真男. 『丸山真男集 第七卷 一九五七』. 株式会社 岩波書店. 1996 年 1 月 10 日
- (7) 林春男. 『“Japanese American” の成立』. 『実験社会心理学研究』. The Japanese Group Dynamics Association. 1987. Vol. 27
- (8) 黒木雅子. 『日系アメリカ人のアイデンティティ変容—エスニシティ, ジェンダー, 国家を超えて—』. 『人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要』. 京都学園大学人間文化学会. 2016 年 3 月

\* 本研究は 2017 年広東外語外貿大学研究生科研創新基金の補助 (課題: 従『兩個祖国』看山崎豊子の戦争観与和平観, 番号: 17GWCXXM - 21) を受けて実施された。